

# 日本語における伝聞証拠性のマーカーと「語彙的引用構造」の 通時統語論的比較

---

玉地 瑞穂

June 11, 2023  
The 48<sup>th</sup> Annual Conference of  
Kansai Linguistic Society

## はじめに

証拠性(evidentiality):

話し手の情報源を示す機能をする言語学的現象

(例: Aikhenvald 2004; Aikhenvald & LaPolla 2007)

世界の言語の中で約4分の1 :

第一次機能として証拠性のマーカーを持つ言語

「証拠性方略(Evidential strategies)」：

テンスやムードのような動詞の語形変化や語彙的要素の  
意味拡張によって証拠性を表す

(Heine & Kuteva 2002; Chappell 2008)

動詞「言う」(‘say’ verb)

伝聞証拠性マーカ―や語用論的マーカ―へと文法化

通言語的現象 (例: Aikhenvald 2004; Ahn & Yap 2014)

## これまでの研究

### 1. 日本語の伝聞証拠性のマーカー「って」の語源についての通時的な研究

古語で引用や伝聞証拠性を表す「とて」

「と言ひて」の「言ふ」が省略されて生じた

(玉地 2015a)

### 2. 伝聞証拠性のマーカー「とて」と「語彙的引用構造」

「と云うて」「と言ふて」の語用論的用法の比較

(玉地 2015b)

# 「語彙的引用構造とは

Lexical Quitative Constructions (LQC) (Michael 2012)

動詞「言う」を使用した引用の用法を持つ言語構造

動詞「言う」から派生した伝聞証拠性のマーカータと同様、  
語用論的用法を持つ。

「語彙的引用構造」を伝聞証拠性のマーカータとして扱うべきかどうか  
が議論される

# 伝聞証拠性のマーカーと「語彙的引用構造」の識別方法

## 語用論的用法の違い

### 伝聞証拠性の語用論的用法

思いがけない新事実を得たときの驚きを表すムード(mirativity)

話し手の命題に対する認識性(epistemicity)

(例： Wang, Katz & Chen 2003; Leuong 2006, Ahn & Yap 2007)

### 「語彙的引用構造」の語用論的用法

話し手が前の話し手に対する異論を表す用法

(例： Güldemann 2008)

## 伝聞証拠性のマーカー「とて」の 語用論的用法の例

- (1) 現在我が子に馬追させ。男の行方も知らぬ身が  
母は衣裳を着飾って。  
おめのとよお局よと玉の輿に乗ったとて。

(丹波与作待夜の小室節, p. 101, 1707)

思いがけない新事実を得たときの驚きを表すムード

## 「語彙的引用構造」

### 「と云うて」と「と云ふて」の語用論的用法の例

(2) 詞： ……もはや毒も何もかまはず氣任せにしたがよい。  
アア惜しい人じゃ。

夕霧： **と云うて**。

(夕霧阿波鳴門, p.212,1712.)

(3) 左嶋：「ハテ扱」

桂：「じゃ**と云ふても**」

(幼稚子敵討、p.246、1753)

話し手が前の話し手に対する異論を表す用法

## 本研究の目的

通時的コーパスを用いて伝聞証拠性のマーカー「とて」と「と云うて」・「と云ふて」が語用論的用法を持つに至る過程を統語論的観点から比較する

### データ:

大系本文データベース(国文学研究資料館)

8世紀から19世紀までに書かれた歌集や歴史的  
文書、物語、随筆、狂言の台本、小説などを収録  
した日本古典文学大系(岩波書店)を電子化

# 研究方法

「とて」、「と云うて」、「と云ふて」の用法を分析  
動詞「言ふ」の標準的意味(canonical 'say')、  
引用、伝聞証拠性、語用論的用法などに分類

統語論的環境を分析

(従属節の最後、主節の最後に位置するかなど)

# 「とて」の意味変化

## 動詞「言ふ」の語彙的意味用法

(4) 汝さへ嫁を得ずとて捧げては下し

(神楽歌、p.323、8<sup>th</sup> c.)

## 引用の用法（情報源を明示する副詞句＋とて）

- (5) 翁いふやう、「我あさごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子となり給(ふ)べき人なめり」  
とて、手にうち入れて家(へ)持ちて來ぬ。

(竹取物語, p.29, 10<sup>th</sup> c.)

## 引用の用法（情報源を明示しない）

- (6) 「もし人とはば是をたてまつれ」とて、文書きて出しける、

(大和物語, p.352, 951)

## 引用の用法（文末）

(7) 「いと、むつかしげに侍れど、かしこまりをだに」とて。

（源氏物語, p.210, 1001）

## 伝聞証拠性

(8) わかきをとこ持ちたるだに見ぐるしきに、  
こと人のもとへいきたるとてはら立つよ。

（枕草子, p.93, 1001）

## 伝聞証拠性 (文末)

- (9) 二月晦がたよりはなほ楼にて習はしたてまつりたまふ。  
山の景色色づく見るも、いとおかしとて。

(宇津保物語, p. 474, 10<sup>th</sup> c.)

## 語用論的用法 (緩和)

- (10) 浄土僧: でもそなたが急ぐによって、  
愚僧も急いだ。

法華僧: いかに急げばとて。

(出家座頭狂言 宗論, p. 22, 14<sup>th</sup> c.)

## 語用論的用法（強調）

- (11) はてやかましよう言はひでもこちらから  
お目にかける<sup>とて</sup>。

（八百屋お七, p. 79, 1668）

## 語用論的用法（予想外の驚き）

- (12) 現在我が子に馬追させ。男の行方も知らぬ身が  
母は衣裳を着飾って。  
おめのとよお局よと玉の輿に乗った<sup>とて</sup>。

（丹波与作待夜の小室節, p. 101, 1707）

# 「とて」の意味変化と統語論的環境の変化

語彙的意味  
「言う」 → 引用 → 引用  
(文末) →

→ 伝聞証拠性 → 伝聞証拠性 → 語用論的用法  
(文末) (文末)

## 「と云うて」の意味変化

「ウ音便化」によって「と言ひて」が「と云うて」に変化したもの  
(Frellesvig, 1995 pp.21)

## 動詞「言ふ」の語彙的意味用法

- (13) かくのごとく言ひはてて、「冠もて来」というてなん、  
とりてさし人ける

(宇治拾遺物語、p.363、11<sup>th</sup> c.)

## 引用の用法

- (14) 鳥告て云、「國の大王、おほくの狩人を具して、この山をとりまきて、すでに殺さんとし給。今は逃べきかたなし、いかにすべき。」**というて**、泣く泣くさりぬ。

(宇治拾遺物語, p.218, 13<sup>th</sup> c.)

## 語用論的用法（文末：反復）

- (15) 太郎冠者： 申し呼ばせられまするか。  
主：「申し呼ばせられまするか。」**というて**。  
なぜに鶯のことをぐいすと言うたぞ。

（小名狂言「擦化」， p.338, 14-15<sup>th</sup> c.）

## 伝聞証拠性の用法

- (16) これは附子**というて**、あの方の吹く風に當ってさえ、  
そのまま滅却するほどの大毒な物じゃ。

## 逆接の用法（と云うて ＋ も）

- (17) 沙那王殿ぢや**と云うても**鬼神ではあるまいぞ。  
（宮増関係の能 鞍馬天狗, p.74, 14-15<sup>th</sup> c.)

## 逆接の用法

- (18) 大名： いかにも子どもが愚鈍な**と云うて**、物によそえて  
覚えられぬことはあるまい。  
（大名狂言 秋大名, p.187, 14-15<sup>th</sup> c.)

## 語用論的用法

- (19) 詞： ……もはや毒も何もかまはず氣任せにしたがよい。  
アア惜しい人じゃ。  
夕霧： **というて。**

(夕霧阿波鳴門, p.212,1712.)

# 「と云うて」の意味変化と統語論的環境の変化

語彙的意味  
「言う」 → 引用 → 語用論的用法  
(反復的用法)  
(文末)

→ 逆接 → 伝聞証拠性 → 語用論的用法  
(異論)  
(文末)

## 「と言ふて」の意味変化

母音の挿入によって「と言ふて」から派生したものの

### 動詞「言ふ」の語彙的意味 > 強調的用法

- (20) なにといふてもおもふによらぬわかみや。  
いつくしいはほんとうとのこのすかたよ。

(田植え草子、p.290、14-15<sup>th</sup> c.)

## 引用の用法

- (21) 住持はや現になつて、「夜前、あなた方入ひで叶わぬ子下風薬を、人に習ふて参つた」といふて、跡にてふさぎもおかし。

(好色一代女、p.363、1682)

## 伝聞証拠性の用法

- (22) ふたりが中は比翼といふて、おもひ死をさした。

(好色一代女、p.114、1682)

## 逆接の用法（と言ふて + も）

(24) 居よ**といふても**爰には居ぬ。

（夏祭り浪花鑑、p.238、1745）

## 逆接の用法

(25) いかに子供じゃ**といふて**あんまりな。

（夏祭り浪花鑑、p.267、1745）

## 語用論的用法（異論を表わす）

(26) 隼人：「こりゃこりゃ、主人には覚期の生害。  
見苦しい。扣いてやれ。」

名山：「それじゃといふて。」

（韓人漢文手管始、p.367、1789）

(27) 左嶋：「ハテ扱」

桂：「じゃといふても」

（幼稚子敵討、p.246、1753）

# 「と言ふて」の意味変化と統語論的環境の変化

語彙的意味 → 引用  
「言ふ」

→ 逆接 → 語用論的用法  
(異論)  
(文末)

# 「とて」と「とてうて」・「とてふて」が語用論的用法を持つに至る統語論的变化の比較

## 「とて」の場合

文末における伝聞証拠性のマーカーへと発展した後、  
語用論的用法を持つようになった

他言語における伝聞証拠性のマーカーと類似

(例 : Leuong 2006, Ahn & Yap 2014)

## 「と云うて」の場合

1. 引用のマーカーへと発展した後、語用論的用法を持つ
2. 逆接の用法を持ったのち、語用論的用法を持つ

## 「と云ふて」の場合

逆接の用法を持ったのち、語用論的用法を持つ

「語彙的引用構造」は伝聞証拠性の用法に発展しなくても語用論的用法を持つ

「語彙的引用構造」が語用論的用法を持つためには、逆接の用法に発展する過程を経る

- (19) 詞： ……もはや毒も何もかまはず氣任せにしたがよい。  
アア惜しい人じゃ。  
夕霧： **というて**。

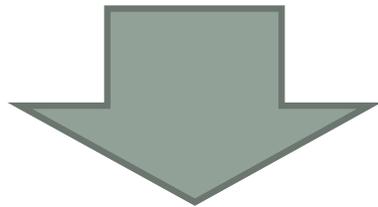
「**というて**」の前に存在する補語句が省略されている

- (26) 隼人： 「こりゃこりゃ、主人には覚期の生害。  
見苦しい。扣いてやれ。」  
名山： 「それじゃ**といふて**。」

「**といふて**」の前に存在する補語句が指示語に置き換えられている

- (27) 左嶋: 「ハテ扱」  
桂: 「じゃ**といふても**」

「と言ふて」の前に存在する補語句がコンピュータに置き換えられている



前の話し手の発話を繰り返し、それに反応するという文脈で用いられている

語用論的用法を持つと同時に、文頭における談話的マーカーのような役割も持つ

# 参考文献

- Ahn, Mikyung & Foong Ha Yap. 2014. On the development of Korean ‘say’ evidentials and their extended pragmatic functions. *Diachronica* 31(3): 299-336.
- Aikhenvald, Alexandra Y. 2004. *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- Evans, Nicholas. 2007. “Insubordination and Its Uses.”. In I. Nikolaeva (ed.) *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, 366–431. Oxford: Oxford University Press.
- Güldemann, Tom. 2008. *Quotative indexes in African languages: A synchronic and diachronic survey*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Leung, Wai-mun. 2006. On the synchrony and diachrony of sentence final particles: The case of *wo* in Cantonese. PhD dissertation, University of Hong Kong.
- Michael, D. Lev. 2012. Nanti self-quotation: Implications for the pragmatics of reported speech and evidentiality. *Pragmatics and Society* 3(2): 321-357.